

No.82 contents

- 2 〈絵画〉総評
- 3 〈絵画〉額は無し、タテヨコ同じ
- 4 2024春季二科展 受賞者・選抜出品者
- 5 今、出品者は何を求め、入場者は何を観たいのか
- 6 2024春季二科展 支援講座・ワークショップ
- 7 〈絵画〉選抜出品作品 寸評
- 8 〈彫刻〉総評
- 9 〈彫刻〉前年度受賞選抜者作品
- 10 ローマ賞 研修報告 2024春季二科展 MEMBER WORKS
- 11 第46回定時会員総会・理事会・運営委員会・部会報告 役職一覧
- 12 第107回二科展巡回展
- 13 108回展に向けて一支援展・支部展・地区展
- 14 第108回二科展日程表・出品規約QRコード・巡回展日程(予定)
- 15 第108回二科展 支援講座・ギャラリートーク・特別展示
- 16 帝国ホテル NIKA ART SPOT 「吉野穀」展
- 事務局だより 編集後記



春季

発行人：生方 純一 発行：公益社団法人 二科会

<https://www.nika.or.jp/> TEL：03-3354-6646

E-mail：nika@nika.or.jp



久しぶりに、ワクワクした気持ちで展示に向かった。春季展の新たな企画S20号だ。コンクールなので、夏の公募との差異は明らか、額は無く、タテとヨコの寸法が同じだから、自由な展示が可能に。搬入出も簡単などなど。理事会で検討を重ね具体化にこぎつけた。しかし、蓋を開けるまでドキドキだった。結果は、応募点数354点と予想を上回り、魅力的な表現も集まったが、106人の落選者には厳しい審査に。

そもそも春季展は、会員の実験的な作品発表と新人作家の育成を目指すものだが、いま一つ特色のない展覧会だった。そこで2022年にフリースペースと個展ブース、さらに今回のS20号。その賞のなかでもオーディエンス賞は、来館者の投票によって決まる、二科展として画期的なもの。寄せられたコメント欄には「夢を感じた」「素晴らしい」「新鮮だった」など反応は良好、なかでも「楽しかった」という声が多くあったのは嬉しい限り。



NIKA+nika/S20号



ギャラリーツアー 中原常務理事

絵画部
額は無し、タテヨコ同じ

私は、アンリ・マティスの言葉「肘掛け椅子のような絵を描きたい」が好きだ。真摯に描いた作品を観せるのは当然として、観る人を和ませる。春季展だから、それが出来ると思う。

さて、展示日の昼食に、生方理事長と都美術館のレストランに行った。まだ新しい会員2人と同じテーブルに。冗談を交えて話しながらの食事だったが、その中の一人が私たちを爺さんと言ったので、「エッ」と思った。私は定年の歳ではある。しかし、会話の流れの中とは言え、理事長を爺さん呼ばわり。長い間、公平でフラットな二科会にと努めてきたつもりで、いまは自由に発言が出来るが、それは節度あつての事のはず…。

中原史雄



ギャラリートーク 春季二科賞 熊谷得志さん



S20オーディエンス賞 授賞式

2024 春季二科展 受賞者・選拔出品者

春季二科賞
春季賞
春季賞
春季賞

熊谷 得志「東京」
金子 豊実「埼玉」
西垣 雅子「神奈川」
寺澤侑見子「愛知」

◆前年度選拔者
(会友)

遠藤美和子「広島」
大蔵 千鶴「石川」
奥田 明宏「岐阜」
金子 豊実「埼玉」
木村 精郎「青森」
久野 真弓「愛知」
熊谷 得志「東京」
白井 偉之「福岡」
滝田 洋子「埼玉」
丹野ゆき子「宮城」
寺澤侑見子「愛知」
長江 明子「東京」
西田 昇平「熊本」
服部由美子「東京」
林 喜子「福岡」
広澤 良子「茨城」
古川 りか「兵庫」
丸岡久美子「徳島」
水谷奈穂子「三重」
三好 るり「福岡」
章 藝「京都」
寺澤 望愛「愛知」

◆3つの個
(会友)

菅島 裕美「石川」
森山 麗子「兵庫」
(一般)
鈴木 綾子「愛知」

彫刻部
(会友)

都丸 洋一「群馬」
岩崎花菜子「東京」
古森清五郎「新潟」

(一般)
洗川 一男「愛知」
岩瀬 公子「新潟」
菅野 芽衣「東京」
山崎 千夏「神奈川」

S20特別賞

荒井 洋子「富山」
近藤 隆弘「愛知」
出月 智子「山梨」
番場美和子「新潟」

S20優作

朝岡 幸子「茨城」
稲田 泰樹「静岡」
今泉歌奈子「愛知」
今泉 光治「神奈川」
奥州谷啓子「東京」
小野寺さゆり「宮城」
菊島ひろ「山梨」
佐野 宣子「神奈川」
島村 薫「兵庫」
高岡 次子「茨城」
林 里美「滋賀」
平野 正代「奈良」
水谷奈穂子「三重」
水野 興三「愛知」
森川 泰光「東京」
吉田 紗知「千葉」

S20
オーディエンス賞

前川普佐雄「埼玉」
佐川 修一「千葉」
今泉 光治「神奈川」
稲田 泰樹「静岡」

NIKA+nika S20号

2024春季二科展

2024. 4. 18~5. 2 東京都美術館

絵画部
2024 春季二科展総評

2024 春季二科展は久しぶりに華やかさが戻ってきた感がありました。何かとご苦労いただいた展覧会委員、事務局の皆さんの努力を称えたいと思います。多くの意見、アイデアをまとめる大変さもあり、「S20号」展では斬新な展示を実現していただきました。また、会員の方々も例年になく多くの人が展示及び投票に参加していただいたことも盛況につながったように思います。

第一コーナーとも言えるべき選抜者コーナーの作品は、前年の本展受賞者の中から選ばれているだけに充実した作品が多く、参加会員の投票による「春季二科賞」「春季賞」が選ばれましたが、かなりの接戦でした。秋の本展でのステップアップが期待できます。

次の個展ブースは一人約10mのスペースに自作を自由に展示できる条件で3名が選ばれ挑戦していただきました。3名とも個性的な作品を堂々と展示し、見応えがありました。拍手を送りたいと思います。

続く会員の作品は一見して作者の手慣れた作品が多く、個性とも言えますが、春季展は新しい表現を試みる場と位置付けられています、あまり新鮮さを感じられませんでした。

フリースペースのコーナーでは新たに手を挙げて挑戦する会員が少なく、毎年同じ作者が続くとフリースペースの鮮度、意味合いが落ちるので、積極的なトライを促したいと思います。

S20号のコンクール展示は、今年の春季展の最大の目玉となりました。実施に関しては展覧会委員の中でも賛否両論があり、検討を重ねた結果、「S20号・額縁なし」で実施することになり、出品要項を各支部、画廊、画材店などに配布しました。応募点数の予測もつきませんでした。締切が近づくにつれ問い合わせが増え、確信に至りました。結果は246名、354点の出品があり、3次審査をする程の出品点数となり、展示方法やスペースを工面しましたが、出品者の3分の1を落選とせざるを得ませんでした。バラエティーに富み優秀作品も多く、当日参加した会員により4名を特別賞に選出し、会期後、帝国ホテルの二科アトススポットに展示、16名を優作として秋の本展にも展示する計画です。

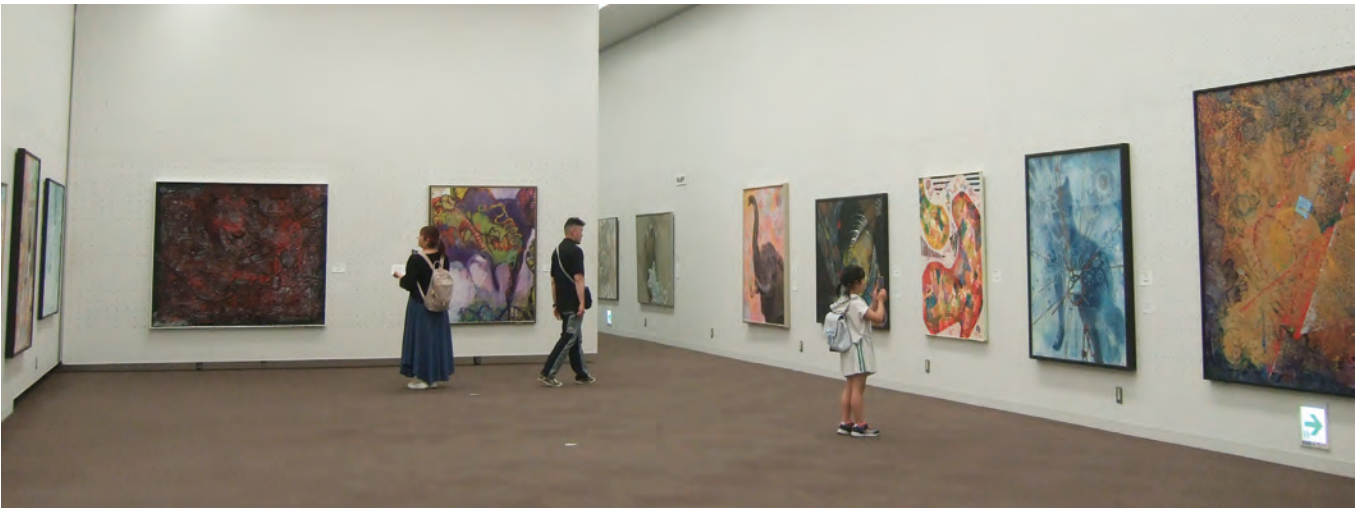
会場では会期中に来場した一般の観客の投票による「オーディエンス賞」を設け、華やかな雰囲気盛り上げました。



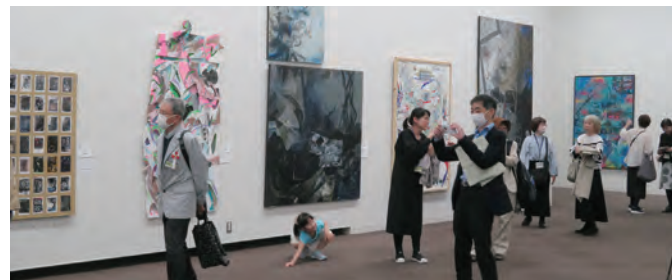
授賞式



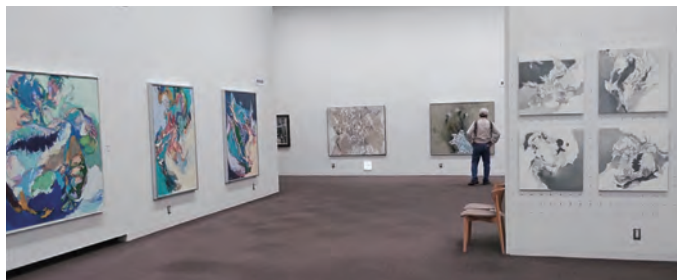
NIKA+nika/S20号 展示会場入口



選抜作家 展示室 2室



フリースペース



3つの個

きたいと思っています。今回は100人以上の出品者の落選を余儀なくされた厳選でしたが、今回展示されなかった方でもぜひ再チャレンジしたいと思える磁力をもつコンクールであり続けるために、受賞者には画廊や帝国ホテル、本展での発表の場等を提供したり、巡回展、支部展、SNS等で広報に努め、幅広い出品者を発掘していくこと、更なる展示工夫をすることで発展継承していきたいと思っています。

また、集合展示の団体展において個の作家を打ち出す個展形式の展示企画「3つの個」は3年目を迎えました。3名はいずれも本展の特別賞受賞作家にふさわしい力作を出品し、それぞれの個性が明確に読み取れる展示空間となりました。各作家が一点か二点で己の芸術観を提示しなければならぬことが宿命である団体展において、力量ある意欲的な出品者がこのような複数展示を望み、また鑑賞者も個々の作家の芸術観、世界観を明確に読み取れるこのような展示も欲しているのは間違いありません。

今後の二科を担う作家の奨励策としてマンネリ化することなく常に新鮮なイン

パクトを与える展示工夫を心がけたいと思います。34名の107回展受賞者の選抜展も力作ぞろい、ギャラリートーク等も活況を呈し、受賞者の受賞後の育成や奨励策として春季展の大きな魅力になっています。

本来の春季展の大黒柱である会員の力作は傾向別に部屋ごとに特徴づける展示工夫をしていますが、会員の実験的な挑戦の場とする春季展の趣旨を象徴するフリースペースも3年目を迎え、自由なサイズや素材で新しい価値観を展示する場としていますが、今後も当初の企画趣旨を徹底し、作家にも鑑賞者にも毎年驚きと発見のある刺激的な展示を志向していきたいと思っています。

目新しさ・新鮮さも必要ですが、春季展の膨らみのある展示構成にするためには、今後の団体展や二科会にとって必要な骨格となる企画はぶれることなく継承していくことも肝要です。

今後も展示形態として様々な可能性を秘めたこの春季展を会員全体のアンケート等で意見・提案を募りながら、常に作家にも鑑賞者にとっても鮮度の高い企画や展示を総力体制で構築していきたいと思っています。

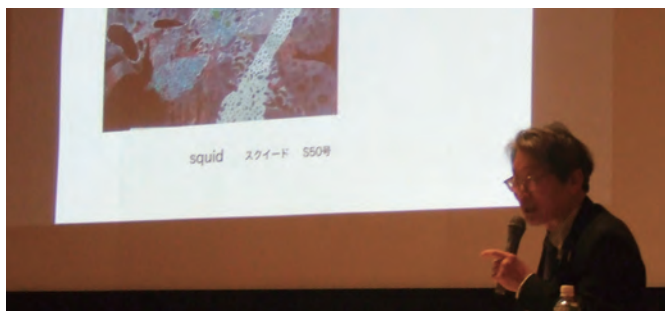
2024春季二科展 支援講座・ワークショップ

◎須藤愛子 支援講座・ワークショップ 午後の部：13時30分～
「私の絵の道程はあまのじゃくから始まった」
画材店で二科展募集のポスター。店主曰く、入選はむずかしい。逆に、絵筆を持つスイッチが入った。インパクトのある作品を描くには何が大切か。
ワークショップ：くしゃくしゃにした紙を鉛筆でデッサンする。



須藤会員 ワークショップ

◎岩田 博 支援講座・ワークショップ 午前の部：10時30分～
「心に残る作品をつくるには」
心に残る作品とは、上手い下手ではない、絵を描くとき技術は必要だがもっと、大事なことがある。ナニカ、その目に見えない「ナニカ」について語る。
ワークショップ：2種類の鉛筆を使い、凹凸による作品づくり。



岩田会員 ワークショップ

今、出品者は何を求め、
入場者は何を観たいのか

山中宣明

本年度の春季二科展も、S20号新企画が功を奏し、入場者も1000人以上増加し、盛会に終了することができました。

「NIKA+nika/S20号」は、Spring(春)とSmall(小品)でもSuperiority(優品)が応募されるようなコンクールを実現したいというところから始まりました。彫刻部の小品カテゴリーや中原常務理事の発案を機に、これからの公募団体の大作と小品の相互作用の必要性を示唆する企画となりました。

暗中模索の中の新企画でしたが、展示委員、理事会、事務局が連携を取り無事第一回公募が実現しましたが、予想をはるかに超える反応や応募があり、二科会の会友を含む出品者も多

数の力作の応募がありました。たとえ大作を制作する環境になくても表現活動・発表の場を求めている若年層はじめ幅広い年齢層の出品者が潜在することを再確認でき、今後の二科に光明を感じる大きな収穫でした。

また小品をただ陳列するのではなく、スクエアと額無し規約を最大限に生かした変化と膨らみのある現代的な感覚の展示を目指しましたが、展示委員だけでなく、若手会員も展示に加わり、魅力的かつ新鮮な展示工夫を凝らし、大変好評でした。

オーディエンス賞の反応が示すように、鑑賞者もただ通り一遍観るだけでなく、自分の審美眼で作品の評価に参加することで、時間をかけてじっくり鑑賞を楽しんでいました。会員の投票による特別賞4名やオーディエンス賞4名も複眼的多角的な視点から選ぶ目的でしたが、いずれの受賞者も質

が高く、会員も鑑賞者も作品の密度を感じ取る眼力には差がないと感じました。

※出品者は制作環境や経済状況にあった発表の場を求めていること、※入場者はただ鑑賞するだけでなく、投票等を通して作品との語らいや自分の審美眼で参加できることを求めていることを再認識し、今後の展示の在り方を模索してい



S20 企画展示室



ギャラリートーク S20特別賞 出月智子さん



新鮮な展示を目指して



前川 普佐雄／今泉 光治
佐川 修一／稲田 泰樹

S20 特別賞

荒井 洋子／出月 智子
近藤 隆弘／番場 美和子

2024春季二科展 選抜出品作品から——作品寸評



立石 洋子 「連鎖する」 F100



長江 明子 「Cirque de Fantasmagorie」 S100



滝田 洋子 「はる君のぼうけん」 F100

楕円形の細胞のようなものが、袋のような空間の中に重なり集合している。また、その空間が幾重にも重なり連なって不思議なフォルムを形成している。背後の細長い竿のようなものも効果的に配置されているが、大きな細胞のようなものが視線が動かないのが残念である。(甲津久生)

立石 洋子

感じたまま、思いつくまま、自分の発想で描く楽しさがある。シンプルなカラージューは軽く感じられるが、新たな技法に工夫の余地が出来る。(森岡謙二)

長江 明子

春の二科展は実験の場、挑戦する心が大事。ジグソーパズルのような構成といままでのモチーフをとり入れたところがある。誰にとってもリラックスな画面がおもしろい。この冒険は熟度のある画面に仕上げるのが課題か。(森岡謙二)

滝田 洋子



奥田 明宏 「龍神祭」 F100



山本 知子 「回想—'24」 F100



古川 りか 「ななめまえのうしろのよこ」 F130

「龍神」とは智慧や徳を備えた霊獣であり、豊かな恵みをもたらすとされている。しかし、時には大雨や水害を引き起こす神でもあり恐れられた。この絵はその祭りを描いている。独自の観察眼により、現実の奥にある生命の輝きや哀切、苦悩を表現し、作者の表現領域を広げている。(江崎榮彦)

奥田 明宏

作品の個性をうまくつくり上げている。色彩がもつイメージ。モチーフの扱い方。コンポジションのバランスなど、いろいろな要素が結ばれてうみだされているが、ルーティンになりやすい。気をつけなければならない。(森岡謙二)

山本 知子

一つひとつの登山用具を丁寧に描き上げていて、作者のモチーフに対する愛着がしっかりと表現された秀作である。段ボール箱の表情も面白い。上部と手前のモチーフが構図的に繋がりがあるとさらに良かった。(甲津久生)

古川 りか

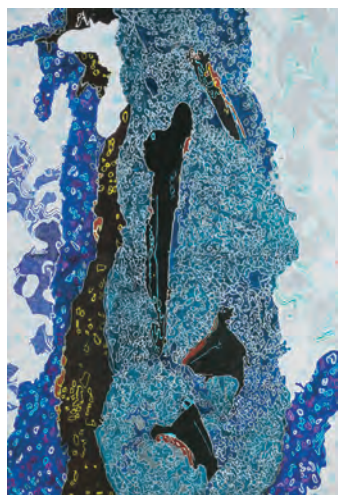
2024春季二科展 選抜出品作品から——作品寸評



寺澤 侑美子 「セルフ・ポートレイト」 F130



金子 豊実 「飛翔2024」 F130

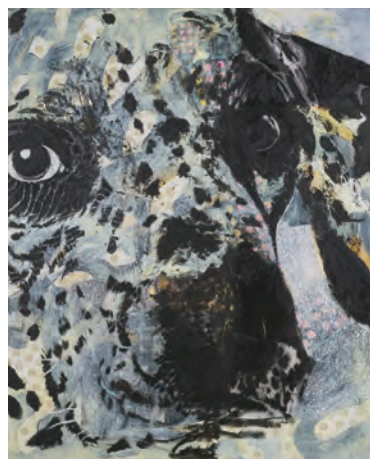


熊谷 得志 「つどう—pelican/2024」 F120

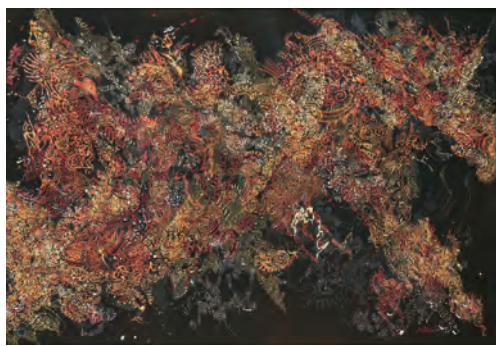
■春季賞 寺澤 侑美子
正面を向いた人物が最初に目に入る。しかし、横顔などに気付き始めると、視覚的なものより内面的な表現の方に興味に移る。歓喜、葛藤、苦悩、不安という感情や心理状態というのが交錯し、見えないエネルギーが可視化される絵画的な表現力が魅力です。(金澤 英亮)

■春季賞 金子 豊実
透き通った都会の空に黒い鳥が飛んでいる。人間社会を観察しながら飛んでいるのか、そう考えると日々の自身の行動を考えさせられる示唆的な作品。朱色の木々と黒い鳥のコントラストが面白く、四羽の鳥がうまく配置され、動きを感じ空間表現になっている。(甲津久生)

■春季二科賞 熊谷得志
ペリカンらしき形は見当たらないが、なんとなく動物の様なものを認識出来る。具象的なカタチではなく自分の内面を表現する形態を描き、更に色やタッチも自己表現する方向に拡大しているようだ。曲線の魅力とその塊が創り出す面白さに引き込まれる。(金澤 英亮)



鈴木 綾子 「虎視眈々」 F100



西田 昇平 「駆ける」 P100



石川 政子 「海に育まれて」 F100

100号キャンバスに犬の顔だけが眼光鋭く描かれている。題名のように、獲物を狙い見下ろすようであろう。鋭い目つきで捕食者の隙を狙う表現がよく観察されている。じつくりと機会をうかがう犬の心理描写が眼光に表現され印象的である。(江崎 榮彦)

鈴木 綾子

抑制的な色彩が爆発的な形を押し込んでいる様に感じる。絵具を塗り重ねるのではなく、ろうけつ染めの繰り返しという事で、かなり試行錯誤が必要だと思われる。偶然性を経験値で必然的なものとする事が作品の深さに繋がっているのだと思います。(金澤 英亮)

西田 昇平

100号キャンバスに、親ガニと誕生したばかりの無数の子ガニがユニークな画面構成で描かれている。蟹の形態観察がおもしろい。作者の観察眼により、海に育まれる生き物に、優しい眼差しを向けた表現が印象的である。(江崎 榮彦)

石川 政子

2024春季二科展 彫刻部 前年度受賞選抜者作品



古森 清五郎 「Explore」



岩崎 花菜子 「いのる」



都丸 洋一 「赤いピンセット」



岩瀬 公子 「ちいさいこども」



洗川 一男 「あそぼ」



山崎 千夏 「望月」



菅野 芽衣 「Voyage」



彫刻選抜作品 展示室

彫刻部

2024 春季二科展

総評

登坂秀雄

上野公園は葉桜となり美しい新緑の中、4月18日より5月2日まで東京都美術館で、2024春季二科展が開催されました。開催二ヶ月前には新型コロナウイルス感染症拡大のニュースが入り、東京都美術館より開催に向けたコロナ対策の問い合わせがありました。二科会として搬入・展示作業・当番の際にマスク着用・検温等を行いました。お陰で春季展期間中コロナ感染症の報告は一件も無く先ずは一安心、良かったと思います。

【展示に関して】 会期前に展示委員で出品作品の写真を基に展示計画を行い、搬入・展示日には先ずは展示計画通りの場所に搬入。その後出品作品の傾向や素材感等を見ながら展示委員全員で意見を出し合いながら多くの作品移動を行い、展示作業を進めました。今年は何年以上に作品移動が多くなりました。一つの作品を動かすたびに会場の雰囲気ガラッと変わり、それに従い展示委員のそれぞれの作品への理解も深まり発言する言葉も多くなりました。結果として個々の作品の存在の位置付けがしつくりと納まり良い展示空間になったと思います。

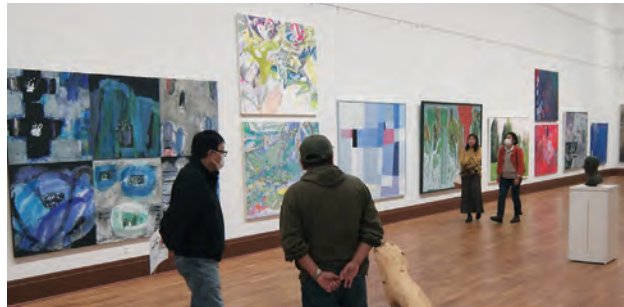


彫刻展示室

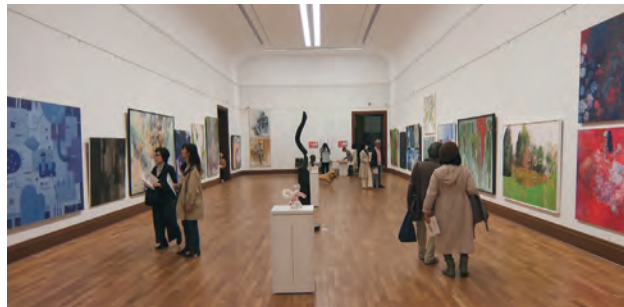
【展示作品に関して】 今回の彫刻部の出品展示点数は会友と107回展受賞者招待出品の7名7点を含め66点が展示されました。春季展では、会員の実験的作品の発表と新進作家の育成を謳っていますが、今回の見応えのある展示会場の出品作品を丁寧に見入つてゆくと、内発的意識の高い作品が多い事に気づかされました。二科会の彫刻は素材の多様性、表現幅の広さは特色の一つであると感じていますが、東京都美術館の展示空間を意識しての実験的表現を切り拓く意欲が見え心強さを覚えました。若き出品者の心構えや会

員達の強い意志力は秋の本展に向けてどのように展開されてゆくのか楽しみです。

彫刻部の展示委員会が発足して約15年、結束力の強さと委員相互の意志力の高まりに感謝と感心する事しきりです。



今回の巡回京都展は、会期を従来実施していた時期に申請することが出来、会期中天候に恵まれ、来場者も多く、盛況のうちに終了することが出来ました。前回は1月開催で、大寒波の影響から厳しい状況でした



が、今回は来場者の数字が戻り、一週間の短い期間ながら5、368人と前回を上回る数字に安堵しました。展示作品数は絵画部（全国巡回117点、地元65点）彫刻部（全国巡回11点、地元2点）デザイン部59点、写真部79点の総数268点が展示されました。



京滋絵画部受賞者は、会員賞・甲津久生、会友賞・小南治次、坂本啓子、山本知子、新人奨励賞・韋藝、会員推挙・水元美穂子、会友推挙・加治木成美、林里美の各氏でした。それぞれ今後が期待され、京滋支部としてより充実した巡回展



巡回大阪展は昨年同様、尼崎市総合文化センターで開催しました。大阪市立美術館改修工事のための臨時会場ですが、スペースの都合により、絵画101点（全国巡回作品12点、関西の会員大作7点、会友22点、一般60点）、彫刻6点（会員4点、会友1点、一般



1点）、デザイン105点、写真123点の総出品点数335点の展示になりました。前年度の反省からレイアウトを見直し、絵画部は2点入選作品を含む支部メンバーの全作品を展示するようにしました。そのため絵画部の巡回作品は12作品に制約されましたが、会場にモニターを設置し、展示できなかった絵画彫刻の巡回作品33点のスライドムービーを放映しました。狭さや暗さなど、決して恵まれた展示会場ではありませんでしたが、来場を促す様々なタイアップイベントなど地元の方々のご協力をいただき、10、270人（昨年11、063人）の来場者を得ることができました。人数的には昨年度より減少しましたが、これは同じ関西の京都展の直後であったことや例年より遅い開催時期、また当時流行していた風邪やインフルエンザの影響などが理由として考えられます。次回まで同じ会場での開催が決まっております。様々な制約の中、より魅力的な展覧会になる可能性を模索しながら来年度の大阪市立美術館での開催へ繋げたいと思っております。

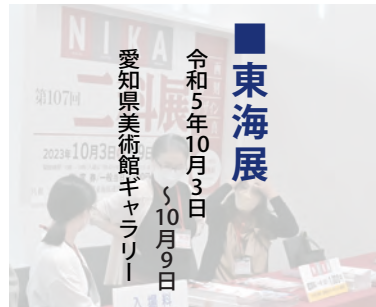
（高畑 彰）

広島では正月明けが恒例となっている巡回広島展、今年で67回を数えました。記録を振り返ると昭和30年第40回二科展を地元百貨店福屋で開催され、その後広島二科倶楽部の結成後援会鑑賞部が発足で支部の形が出来たと記録されています。二科の巡回展は全国レベルの展覧会を地方に誘致したいという故増田勉、新田稲實両先生の願いで今日まで続いてきました。しかしながら今日若い世代の出品者が少なくなり、会の存続が僅々の課題です。芸術の世界でもデジタル化の波が押し寄せ、ネット配信やデジタル作品が多く見られる傾向になって来ている。自身の問題として、これからどんな作品を創りどういう方法で発表していくか、試行錯誤していかねばと感じる次第です。

（高松良幸）



私自身、東京での審査でコロナになり、東海展はどんな影響があるかと心配しつつ、10月3日から始まった第107回二科展巡回東海展。有り難いことに、初日から入場者があふれ、会期中の入場者数は5、337人にもなりました。愛知県美術館の全室を使い理事の先生方の大作を始め、地元出品者の大作が、二科の力強

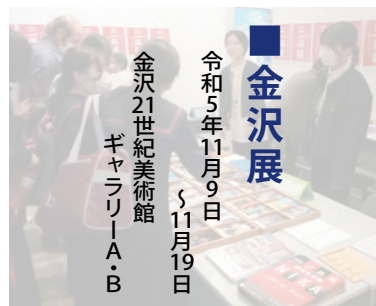


さを感じさせたと自負しております。展示数は、絵画201点、彫刻23点、デザイン133点、写真237点でした。出品者が招待券を友人、知人に送り、会を盛り上げようと頑張っているのがとても頼もしく思いました。さらに当日券を現金で払って入場してくださる二科展ファンが毎日80人、1000人と来られ感謝しております。これも北川民次先生や安藤幹衛先生はじめ、先輩の先生方の努力の賜と感じ、巡回東海展を益々盛り上げて行きたいと思っております。また東海展は、絵画部、彫刻部、デザイン部、写真部が互いに仲良く、これが東海支部の宝だと思っております。

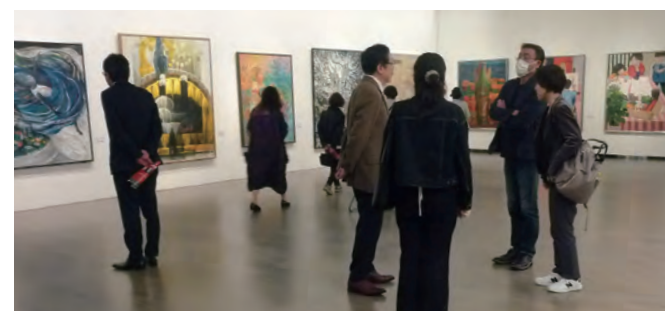
（堀尾 一郎）



第107回二科展巡回金沢展（二科会・北國新聞社・石川県芸術文化協会主催）は、金沢21世紀美術館市民ギャラリーA・B会場で絵画・彫刻・デザイン・写真の4部門で開催されました。11日間で3、512人の来場がありました。来場者は作家のみずみずしい感性にふれ、盛況のうちに閉幕しました。



二科北陸支部から地元作品を中心に本展からの選抜作品が披露され、開場式では、主催者である二科会や北國新聞社の他、多くの美術関係者から賛辞を頂きました。また、高校の美術専門コース、中学校の美術部の団体鑑賞があり、感性を磨くとともに効果的な技法に触れ、後進の育成の場となりました。絵画部では107点の意欲作が並び、粕谷正一支部長、五味祥子、他5名の会員が解説を担当し、作家の意図や作品鑑賞のポイントなどをわかりやすく話しました。彫刻部では文部科学大臣賞を受賞した会員の林一平氏の大作や気鋭の小品11点



が、造形美や細部の仕上がりの美しさを競い、来場者を楽しませていました。デザイン部では外務省後援のもと日本ASEAN協力50周年をテーマとした47点の意欲作が並び、来場者は、会場から明るく華やかなアイデアを感じ取っていました。写真部では73点の展示作品について写真を愛好する人々が作品について語り合い、好評を博していました。販売コーナーは終始盛況で、多くの来場者が絵はがきや画集を買って求めています。

（茶谷 弥宏）

108回展に向けて

・支部展

全国各地で
支部展開催
会場で
切磋琢磨



・地区展



中部二科展 愛知・岐阜・三重



関西二科展 京都・滋賀・大阪・兵庫・奈良・和歌山



西人社展 福岡・山口・佐賀・大分・長崎

一般の出品規約は
下記のQRコードから
ダウンロードできます



・支援展



第23回二科北海道支部展(支援展)



第8回二科東北支部連合展

埗 珠世

二科東北支部連合展が6月1日より青森で開催されました。

仙台6回、秋田1回、青森1回と二科会の支援事業の連合展を、生方理事長、中原前常務理事、前田理事、埗、そして今回は、七戸町立鷹山宇一記念美術館開催の吉野先生個展観覧から足を伸ばして菅原先生も一緒にオープニングを迎えました。東北の豊かな自然の中、新聞社ビルの大きな会場。青森ゆかりの作家の鷹山宇一、月館れい先生の大作も展示されており、中原先生支援講座には他の団体の方も参加されていて、活気溢れた展示会でした。

第108回二科展 日程表

8月	22日(木) 搬入(業者・個人)
23日(金) 搬入(個人)16時まで	24日(土) 27日(火) 審査
28日(水) 入落通知発送	30日(金) 31日(土) 業者選外作品搬出
9月	1日(日) 選外作品搬出(彫刻)
2日(月) 3日(火) 個人選外作品搬出	3日(火) 展示日
4日(水) 展示会初日	「彫刻」10時30分
作品研究会(絵画)	10時30分
授賞式12時	懇親会16時
8日(日) ギャラリートーク	「絵画」13時
「彫刻」14時	10日(火) 休館日
12日(木) 支援講座	16日(月) 展覧会最終日
14時まで	搬出(彫刻)
17日(火) 搬出(絵画・彫刻)	18日(水) 搬出(絵画)

第108回二科展 巡回展日程(予定)

◆東海展	愛知県美術館ギャラリー 令和6年10月22日(火) 10月27日(日)
◆大阪展	尼崎市総合文化センター 令和6年10月31日(木) 11月10日(日)
◆京都展	京都市京セラ美術館 令和6年11月26日(火) 12月1日(日)
◆富山展	富山市民プラザ 令和6年12月4日(水) 12月9日(月)
◆鹿児島展	鹿児島県歴史・美術センター 令和7年3月2日(日) 3月9日(日)
◆福岡展	福岡市美術館 令和7年3月18日(火) 3月23日(日)



巡回鹿児島展初日は鹿児島マラソンと重なり、交通規制など心配しながらオープンした。オープニングでは主催者を代表し、鹿児島県民に60余年にわたり「鹿児島に春を呼ぶ美術展」として親しまれていることを紹介。初日、東京から吉野毅常務理事らの同席を戴き、南日本新聞社、西健



巡回鹿児島展は絵画129点(会員102点、受賞者5点、地元出品者22点)、彫刻12点(全国巡回作



会期7日間の入場者数は2,700人。コロナ禍の105回展から約600名、第106回展より約300人多い入場者となった。

吉常務理事、支部長の4人でテープカットをおこなった。開場式の後、西健吉常務理事、午後は祝迫、野平、平林がギャラリートークを担当した。会期中、土、日の午前、午後それぞれ会員によるトークを実施し、参加者も多かった。会期前の準備など幾らかの反省は残るが支部同人がそれぞれに協力して事故なく開催出来た。

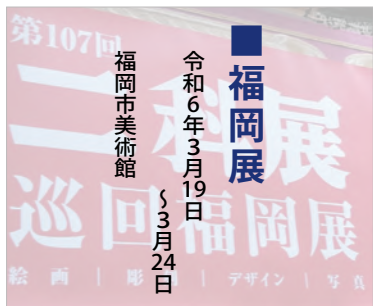


経費削減のため、昨年からポスター・チラシの枚数を考慮した。新聞社広告2回、会期中の二科展作品紙上展、カラー作品6点を掲載した。新聞紙面の事前広告の時期、タイミシングなど効率よくできた。

品11点、地元会員+1点)、写真88点(会員27点、受賞者49名、地元出品者16名)、デザイン93点(会員31点、会友7点、受賞者51点、地元8点)を展示した。また、前回に同様にウクライナ支援、今年は併せて能登半島地震支援のチャリティを実施し、額絵販売の売り上げの一部をユニセフを通じてウクライナ、能登半島地震支援チャリティとした。



前回(106回二科展巡回福岡展)は特別展示室での開催でしたが、今回は更に会場が狭くなり窮屈な展示を余儀なくされました。会場そのものは改装後の美しい会場で見栄えはするものの、狭い会場をどのように使うか、絵画・彫刻・デザ



イン・写真各部の組み合わせ・構成等、かなり打ち合わせが必要となり、熟考を重ねました。最終的には、各部の協力により見やすいスッキリした会場を作ることができたように思います。当巡回展のみの西日本新聞社賞を選考し表彰をおこなっていますが、今回絵画部は角加代子(福岡)、古門美佐枝(福岡)、松本陽子(佐賀)、デザイン部は垣外波瑠香(福岡)、写真部は大原紘一(福岡)の5氏が選出されました。

例年開催のギャラリートークは3月19日(火)11:00から、3月24日(月)13:30から、会員・会友等によりプレゼントしました。

西日本新聞に山口博司会員(会員賞)、山崎美恵子会員、白井偉之氏の出品作品と展覧会の紹介が掲載され、有明新聞に牟田志津子会友、塚本和美会友、鷹尾重徳氏の作品が掲載されました。またテレビ西日本のニュース等でも展覧会の様子が紹介され、会友受賞の立石洋子会友の作品紹介・インタビュー等も放映されました。また、福岡県美術協会広報誌FAS 66号に福岡和子会員の作品と展覧会の告知が掲載されました。(田浦哲也)

第108回二科展

・支援講座

◎加賀裕子 支援講座

「絵を描くことは
人生の絵日記のようなもの」
(午前の部 11時)

◎粕谷正一 支援講座

「絵作りについて」
(午後の部 14時)

日時：9月12日(木)
場所：国立新美術館 講堂
応募：参加ご希望の方は左の
QRコードでアクセスい
ただくか、二科会ホーム
ページをご覧ください。
参加費：3,000円
定員：90名(先着順)

参加申し込みは
こちらから↓



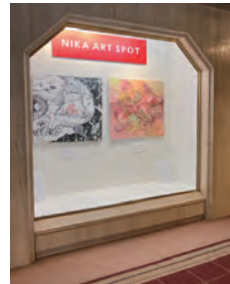
・ギャラリートーク

絵画部：9月8日(日) 13:00
彫刻部：9月8日(日) 14:00
デザイン部：9月7日(土) 15:00
写真部：9月7日(土) 11:00
9月8日(日) 11:00

・NIKA+nika/ S20号

特別展示

2024春季二科展 新企画
「NIKA+nika/ S20号」コンクール
の公募入選作品より、優作や
オーディエンス賞受賞者の作
品を特別展示コーナーに展示
します。
※特別賞作品は帝国ホテルに展示
しています。

帝国ホテル東京本館中2階
「NIKA ART SPOT」
にて展示

〔前期〕

2024年5月10日～11月12日
荒井洋子・出月智子

〔後期〕

2024年11月12日
～2025年5月9日
近藤隆弘・番場美和子

事務局だより

元旦のマグニチュード7.6
の能登半島地震、そして羽田
で起きた翌日の飛行機事故。
令和6年は国内外での暗い
ニュースで始まりました。

そのような中で、新しい
企画S20号の反響は嬉し
く、来館者から寄せられ
たコメントや、帝国ホテル
NIKA ART SPOT
展示に売却済シールが貼ら
れた特別賞作品の報告も嬉
しく、残念ながら落選され
た方が最終日にアドバイス
を貰って何かを掴んで搬出
される姿に関係者一同、共
通の期待感を感じました。
今年5月、3名の先生が
退任されました。コロナで
二科展開催が見送られた4
年前の2020年、役員の

第46回総会で退任された中原・
木戸・尾崎各氏に記念品を贈り、
永年のご尽力に感謝した。



編集後記

◆毎回、各会員の皆様にご
寄稿をお願いし戴いた文章
を編集しながら、わずかに
行の文章の中にも、筆者の
思いや感情が如何に多く封

2024春季二科展の展示者数と展示点数

会場：東京都美術館 会期：2024年4月18日～5月2日

	(絵画)		(彫刻)		展示者数	展示点数
会員	150名	150点	59名 (会友9名含む)	59点 (会友9点含む)	209名	209点
選拔者	37名 (個展3名/賞4名)	55点	7名	7点	44名	62点
S20入選者	140名	148点			140名	148点
計	327名	353点	66名	66点	393名	419点

【NIKA+nika/S20号コンクール】出品 246名・354点 入選 140名・148点 (二点入選8名)

じ込められているかという
ことを実感し、編集にあた
ってまいりました。今期も
また各部、各委員の皆様
にご寄稿いただき誠にあり
がとうございました。
◆今年はS20号、個展ブ
ース等新しい試みを取り入
れながら、より良い審査、
より良い展示をめざし開催
された春季二科展でした。
◆1979年二科会が社団
法人になった年、二科ニ
ュース第1号が発刊されてか
ら今号で82号となります。
春季二科展は「実験的創造の
場と次世代への創造の場」を
掲げてまいりました。創作
者としての責任と義務を果
たしながら二科会の運営に
携わってまいりたいと強く
思っています。(深見)

編集委員

委員長(絵) 深見 まさ子
委員(絵) 寺田 眞
" 渡辺 俊文
" 酒井 とし子
" 山口 博司
(彫) 上田 哲也
担当役員 田浦 快
野村 みぞら

令和六年七月二十日発行

公益社団法人 二科会

〒100-0022

東京都新宿区新宿4-3-15

レイフット新宿 501号室

電話 03(3354) 6646

FAX 03(3354) 4768

千葉伸子・藤沢 恵

長谷川 登

事務局長 埴 珠世

事務局 埴 珠世